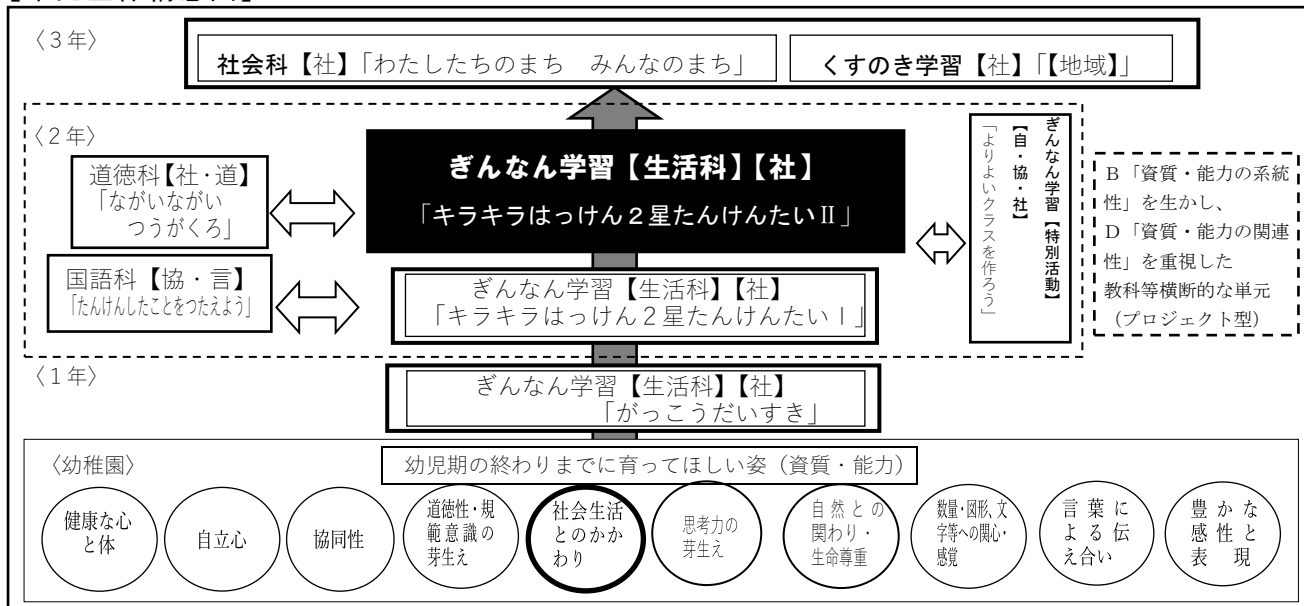


### 3 実践事例 第2学年

「キラキラはっけん2星たんけんたいⅡ」 ぎんなん学習〔生活科〕（+国語科・道徳科等）

#### 【単元全体構想図】



#### 【単元構想について】

本単元は、B「資質・能力の系統性」を生かし、D「資質・能力の関連性」を重視したプロジェクト型の単元である。本単元において育てたい資質・能力の出発点を、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下「育ってほしい姿」）」の【社会生活とのかかわり（社）】であることを踏まえ、幼児期の育ちが本単元で発揮されるように意識した。また探検場所の決定、探検後の報告会での準備など、友達との合意形成には、ぎんなん学習【特別活動】で身に付けた資質・能力を発揮したり、愛着や親しみといった道徳的価値をより具体化した姿で関連・深化するよう、道徳科で高まっている資質・能力を発揮したりするような教科等横断的な単元を構想した。

本学級の子どもが考える「ふぞくのまち」とはどのようなものだろうか。ほとんどの子どもは、「ふぞくのまち」を、学校という学びの場と考えているように見える。そこに、地域への愛着や親しみといった要素が入り込んでいないと考える。実際、子どもに自分の生活の身の回りのことを聞くと、「ふぞくのまち」の話題が出てくること自体珍しい。これらのことは、附属小学校という、子どもの通学域の問題で済ませていいことではない。子どもが、学校を離れて、実際に地域に入り、何度もかかわる中で互いの考え方や価値観を知り、地域の人々の存在を意識しながら地域の一員として自覚するような関係づくりが希薄であるのは、他の小学校区でも同様の実態であろう。子どもたちの共通のフィールドである附属小学校の周りを地域の人々や場所との「出会い」の場として設定し、子どもが、「ふぞくのまち」を意識するような継続的で、深いかかわりが持てるような手立てが必要であると考えた。

上記のような教師の問題意識の中、新型コロナウイルス感染症拡大により、さまざまなかかわりが厳しく制限された。1学期には、「ふぞくのまち」の「キラキラ」を発見するために、町探検に出掛けたが、子どもたち自身もどのように「ふぞくのまち」とかかわっていけばいいのか模索していた。制限が多い中、恐る恐る「ふぞくのまち」とのかかわりを持ち始めた子どもたちは、「もっと見たい」、「もっと話したい」という思いをふくらませていった。まちの人たちも、2年ぶりの子どもたちの訪問に驚きとともに、「ずっと待っていたよ」「来てくれてありがとう」といった、素直な思いを語ってくれた。

また、探検には保護者がサポーターとしてかかわってくれていたが、「ふぞくのまち」の好意的で温かい雰囲気を感じ取っている方も多かった。「子ども」「地域」の思いや願いを生かし、互いが互惠性を持ちながらかかわることができるよう教師の意図的・計画的な働き掛けによって、子どもが意識的・自発的に「ふぞくのまち」にかかわることができる絶好の機会であると考えた。

### 【単元のねらい】

- 自分たちの生活が地域の様々な人々や場所とかかかわっていること、自分や友達のよさや成長に気付く。
- 地域の様々な人々や場所と自分の生活とのかかわりを考えたり、気付いたことを自分なりに表現したりする。
- 自分の住んでいる町に関心を持ち、地域の様々な人々や場所と進んでかかわり、親しみや愛着を持ち、適切に接したり安全に生活したりしようとしている。

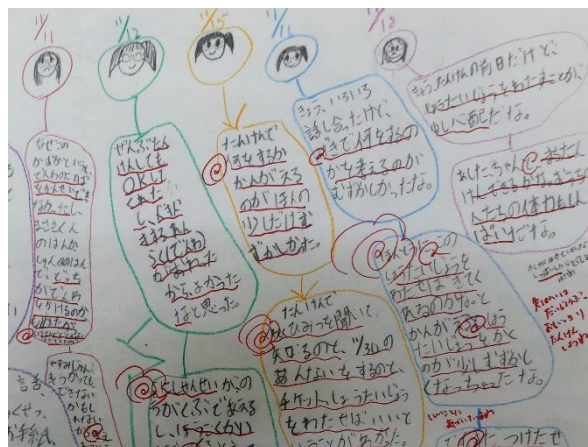
### 【単元の展開（全 24 時間）】

場面	子どもの課題意識と主な学習活動	評価の規準	時間
出合い	<p>「ふぞくのまち」にはどんな「キラキラ」があるのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 1学期の探検を振り返り、「キラキラ」（心に残ったことや興味を持ったこと）を話し合う。</li> <li>○ グループに分かれて、探検するコースや探検に必要なことを考えたり調べたりして、町探検の計画を立てる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 町の人々や場所について見付けたことや知りたいことを進んで話し合っている。</li> <li>● これまでの経験を生かしながら、自分たちで計画を立てている。</li> </ul>	3
追究	<p>どのようにすれば、自分たちの気持ちが「ふぞくのまち」の人たちに伝わるのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 探検先に予約の連絡を行う。</li> <li>○ 報告会の招待状をつくる。</li> <li>○ 計画したことを基に町探検をする。</li> <li>○ 町探検で気付いたことや感じたことを、グループで話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「ふぞくのまち」の人たちと適切にかかわる方法を考えている。</li> <li>● 町の人々や場所とふれあうよさを感じている。</li> <li>● 町探検で気付いたことや感じたことを進んで話し合っている。</li> </ul>	10
振り返り	<p>「ふぞくのまち」の人たちに「キラキラ」を伝えたい！</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「ふぞくのまち」の人たちに紹介するために、様々な方法でまとめる。</li> <li>○ 自分たちの思いを生かしながら、町探検についてまとめ、「ふぞくのまち」の人たちに伝える。</li> </ul> <p>「ふぞくのまち」ってどんなまち？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 今までの学習を振り返る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 自分の思いに合う表現方法を選び、工夫して表している。</li> <li>● 町のすてきなところや友達のよさに気付いている。</li> <li>● 地域の様々な人々や場所とかかわろうとする意欲を持ち、自分の成長に気付いている。</li> </ul>	11

### 【単元の実際】

本単元の導入では、1学期の町探検を振り返り、新たな町探検への意欲化を図った。1学期を含め5回目の探検となる今回は、子どもたち自身で連絡を取り、探検に行けるかどうか確認することにした。さらに、子どもたちが探検のお礼の意味を込めて、町探検の報告会に呼びたいという声が多く、連絡を取る際にお願ひすることにした。「ふぞくのまち」の人たちにも、仕事があり、生活がある。そんな中で、報告会に呼ぶのは難しいことが予想された。そこで、探検の時に、心を込めてつくった招待状を渡すことで、何とか自分たちの思いを伝えることができるようにしたいと考えた。また、招待状づくりを通して、前回のお礼や言葉遣いなど、礼儀を踏まえた適切なかかわり方をする必要に気付くと期待した。招待状には、

報告会の中身まで踏み込んだ案内が無ければ、相手に自分たちの思いが伝わらない。そのためにも、見通しを持って、探検で見たり聞いたりしなくてはいけないことにも気付くであろう。報告会では、「ふぞくのまち」の人たちを呼ぶ。探検でお世話になった人たちを迎え自分たちの思いを伝える子どもたちは、ふぞくの町への親しみや愛着を持つことができると考える。ただし、実際、報告会に来てくれる人は数少ないと予想される。自分の来てほしいという思いが叶った子どももいれば、なぜ来てくれないんだろうという思いを持つ子どももいるはずである。そのような子どもたちに、「ふぞくのまち」がどんなまちかを問うことにより、「ふぞくのまち」についての素直な思いを語るだけでなく、今までの自分の学び方や「自分自身」の成長について気付きを深めることができるのではないかと考えた。



2星キラキラえいえいおーカードの一部

### <2星キラキラえいえいおーカードによる振り返り>

ウェビングマップの手法を生かした振り返りカードの書き方を工夫した。子どもが表情を描き、そこに、自分の気持ちを書くことで、楽しい雰囲気の中で、自分の思いや気付きを容易に表すことができるようになった。カードは子どもたちが名付けた。以下、この振り返りカードを基に、「出会い」「追究」「振り返り」の場面を単元の実際を見ていくことにする。

### 子どもと対象をつなぐ手立て 「出会い」(第0～3時)

新型コロナウイルスの感染状況が非常に悪化した影響で、1学期末に行った町探検の報告会は2学期になり、①6年生、②実習生、③保護者というように、様々な相手に行われた。タブレット端末でプレゼンテーションを作成したり、劇や紙芝居で伝えたり様々な表現方法を子ども自身で選び、行われた。子どもたちは、自分たちの思いの表現方法に納得しつつも、相手に伝えることの難しさも十分に感じ取っていた(第0時)。



写真1 パン屋さんからの手紙

報告会の終了後、ある探検先から届いた1通の手紙を子どもたちに紹介した。「探検に来てくれて嬉しかった。これからも地域に根差していきたい。また会いましょう」という内容だった。「また〇〇さんに会いたい」「1学期のように探検に行きたい」というような子どもたちの意欲をくすぐる「出会い」となった(写真1)。

### <振り返りカード> 第1時

- どんな人と会えるかな。けど、人と話すのは不安…。 ・町のキラキラをもっと見つけたい。
- 内田パンさんから手紙が届いていたよ。「これからもよろしくお願いします。」と書いてあったから、行こうと思います。
- 内田パンさんから手紙をもらったのがうれしかったよ。

### 子どもと「他者」をつなぐ手立て 「追究」(第4～13時)

1学期から続き、5回目となる今回の探検では、子どもたち自身で連絡を取り、探検に行けるかどうか確認することにした。その際、子どもたちからは、第0時での経験からただ探検に行くだけでなく、お礼の意味も込めて、自分たちの学びの成果を報告する会に「まちの人」を呼びたいという声が多く出た。そこで、連絡の時に報告会に来てくれるよう、一緒に伝えることとした。「どのように伝えれば、来てほしいという気持ちが伝わるのだから」



写真2 探検先に連絡する様子

う。」という子ども自身の問いが生まれ、相手意識を持って活動することができた。子どもたちから連絡した際、町探検には快く受け入れてもらえた（写真2）。

<振り返りカード> 第6時

- 青少年センターに行けることになったよ。でも、報告会には来れないそう。しょうがない、だがまだチャンスはある。
- ああ、内田さん報告会来れないの。手術頑張ってください。・小西先生が報告会に来ると言ってくれたからうれしい。
- 報告会に来れないと言われたけれど、探検でもう一度聞いてみよう。
- 全部のところにOKをもらえた！でも、報告会に全然来てもらえない。どうすればいいのかなあ。
- ふぞくっ子の目を見てもらえば来てくれるはず！

しかし、報告会に来てもらうことを、ほとんどのところに断られてしまった子どもたち。「自分の気持ちをしっかり伝えればまだチャンスがある」「絶対来てほしい」とまだまだ、あきらめていない様子。そこで、招待状づくりを行うこととなった。子どもたちは、どんな報告会をするか考えることで、探検で何を聞くのか、何を見るのかなど、探検への見通しをもち、探検への期待を膨らませ、「ふぞくのまちの人」へ意識を向けることができた。また、招待状づくりは一人ではできないものである。同じ探検グループと話し合わなければ前に進むことができない。子どもたちは、どうすれば、自分たちの気持ちが伝わるのか、どんな報告会にすれば、来てもらった人に来てよかったと思ってもらえるのか、子どもたちなりに考え抜いた招待状づくりである（写真3、4）。



写真3 招待状



写真4 町探検で実際に渡す

<振り返りカード> 第7時

- 報告会は、劇とクイズをしようと思います。
- 招待状で本当に来てくれるのかなあ。
- ふぞくのまち、もっと詳しくなるかなあ。
- 話し合いがあまりできなかったよ。難しい。
- 「お互いのことを知るといいことがある」が難しい。
- どうしても来てほしいから、ほかの班と考えよう。

<振り返りカード> 第8時

- 東署の人にきてもらってみたいよ。
- 招待状づくりが大変。なかなか思いつきません。
- 招待状できてくれるのかと考えると、少し難しいよ。でも、まだ町探検まで日があるから、チャンスはある。

<振り返りカード> 第10時

- はやく、キラキラを見付けに行きたい。・町探検がちょー楽しみ。招待状できたけど大変。明日、本当に渡すから緊張。
- 招待状で伝わるかな。報告会にいっぱい来てくれるかな。・招待状がこんなに時間がかかるとは思っていなかった。
- 招待状を渡すときには、笑顔で嬉しそうにして、渡した人を笑顔にしたいです。

子どもと自分自身をつなぐ手立て「振り返り」（第14～24時）

1月30日の5、6校時に報告会を行うと招待状に書き、全16カ所全ての探検の場所で手渡した子どもたち。来てくださることになった3人（東警察署署員、道後餅屋店主、愛媛大学ミュージアム教員）とまだ来てくれるかどうか分からないまちの人たちを意識した表現方法を考えた。例えば劇をする場合、何を伝える劇にするのかがはっきりしないと、相手に喜んでもらえないということになり、子どもたちはどうするか相談を繰り返していた（写真5）。途中、道後温泉事務所の方が、子どもたちの招待状に感動したということで、報告会に来てくれることになった。報告会前日になり、ようやく話がまとまってきた。「学校生活の中で、今までで一番大変」と感想に書いた子どももあり、充実した活動となり、さらに、報告会への期待が膨らんでいった。



写真5 報告会準備

<振り返りカード> 第22時

- 時間が無い！うまくいなくてごちゃごちゃになっちゃった。・やっぱり友達との話し合いは大切ななあ。
- 今日は報告会の準備が最後になり、疲れました。学校生活で今までで一番大変でした。

報告会当日。突然学校に連絡があり、そば屋の人が急遽来てくれることになった。やはり、子どもたちの招待状に感動し、社内で再度検討してくださり、報告会に来てくれることになった。嬉しいハプニングであったが、子どもたちのやる気は更にアップ。5人の方が教室に来てくださり熱気は最高潮。あっという間の1時間だった。さらに、子どもたちは、来てくださった方たちに質問攻めである。「なぜ、警察官になったのですか?」「探検の次の日に総理大臣が来ていて、道後の説明をしていたけれど、どんな気持ちでしたか?」「虫博士の仕事で大変なことはなんですか?」子どもたちは、今までの学習を生かしながら「ふぞくのまち」の人への思いを高めることができた(写真6)。



写真6 報告会

<振り返りカード> 第23時

- 一人ではできないけどみんなでやったら緊張しつつできたと思います。
- ふぞくのまちの人とで会えて、緊張したけどドキドキだったよ。
- ふぞくのまわりには、こんな人がいるんだと分かった。
- やっぱり成長したな。
- やりきった。今の自分輝いているかも!

新たな思いや願いを持つ (第24時)「振り返り」

単元終末、報告会の次の日、「ふぞくのまちはどんなまち?」を子どもたちに問うことで、単元全体を振り返らせた。思考ツール「Yチャート」を活用して「ふぞくのまち(学習材)」「学び方(他者)」「自分の成長(自分自身)」の三つの視点で単元を振り返った(写真7)。子どもたちは「親切な町」「優しい町」というような発言が多くあり、なぜそう思うようになったか聞いていくと「パン屋さんがいろいろと教えてくれた」「報告会で苦労したからきてくれてうれしい」というような今までの自分の学び方や自分の成長を感じさせる発言が多く出てきた。さらに、報告会に来られなかった人たちから届いたビデオメッセージを見ることで、「私たちを見てくれているんだ」というような、ふぞくのまちの人への思いが凝縮された思いが出てきた。

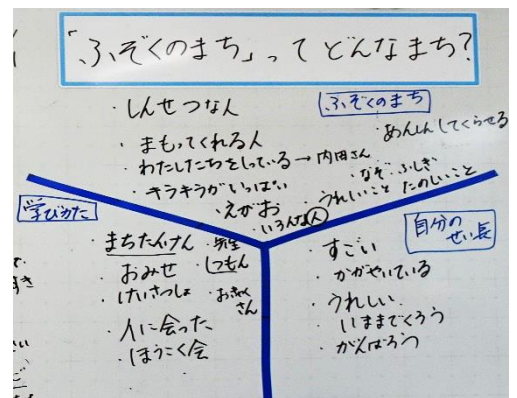


写真7 3つの視点での振り返り

<振り返りカード> 第24時

- 報告会に来られなかった人がメッセージをくれて嬉しい。優しい人がたくさんいるよ。今までよく頑張った。
- ふぞくの町の魅力に気付いた。思ったよりすごかった。
- メッセージをもらえて心がほっかほかになったよ。いっぱい頑張ったかいがあるな。
- 人がキラキラだよ。でも、やり遂げたわたしもキラキラってことじゃないかな?
- やっぱり忘れていなかったんだ。よくやったぞ〇〇(自分の名前)
- 最初と比べて考えてみたら、今の自分は地域の人みたいにキラキラ!最初はチームワークが少しだったけれど、今はみんな仲よし。

【単元の成果と課題及び次年度の実施に向けて】

- 子どもから、積極的に「ふぞくのまち」の人たちに働きかけるようにする意図的・計画的な指導、手立てを構想して実践に取り組んだ。「どうすれば大人は報告会に来てもらえるか」という課題を解決するために、電話による交渉をしたり、招待状を渡したりした。報告会に「ふぞくのまち」の人が実際に来ることで、自分たちの思いや願いを改めて振り返ることができたとともに、子ども自身に社会とのつながりを実感させることができた。
- 「振り返り」の場面では、三つの視点で学びを自覚できるようにした。ただ、そのための問い掛けや方法、時期については、まだまだ検討の余地がある。三つの視点を基に、単元全体を振り返ることができる、シンプルな手立てについて考えていきたい。
- ☆ 「ふぞくのまち」への働き掛けによって、自分たちだけではなく「ふぞくのまち」の人たちの心にも影響を与えたことを子どもたちは目にしてきた。自分たちの何が「ふぞくのまち」の人たちの心にもそのような影響を与えたのかを振り返ることで、更に「深い学び」につながる可能性がある。